

社会委員会通信

45

2013.7.7

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

6月30日(日)主日礼拝後、私たちが敬愛する吉田登兄による「帰国報告会」を開催しました。

吉田兄のお話は二つの時期に分けられるように思います。前半は2002年12月、バンコクにエイズ孤児100人を収容する施設「ハッピーホーム」を完成させるまでのお話、後半はチェンマイに「さんたの家」を自力で開園し、親や社会から見捨てられた子どもたちをまさに手塩にかけてたくましく育て、教育した時代です。

どちらも飛び込む時の人生をかける決断の苦しみ、さまざまな予測を越えた障害との闘い、責任感との葛藤、お金の問題等、苦難の連続であったと想像されますが、吉田兄は特に後半は、むしろ明るく、生き生きと話をされました。マタイ18章14節を心の支えとしてきたとおっしゃる吉田兄にとっては、小さな者たちと共にいた後半が、より充実されていたのではないのでしょうか。

単に志の高さだけでは成し遂げられない大きな奉仕事業をここまで完成させて帰国された吉田兄の人間としての総力の大きさを感じた報告会でした。

昼食は「タイ・さんたの家と共に歩む会」の皆さんが腕をふるって作って下さったタイカレーを皆で頂きました。吉田兄を支え続けてこられたこの会の皆様に敬意と感謝を表します。

参加者は53名(男性14名、女性39名)でした。ご参加ありがとうございました。

(社会委員長：M・A)



養護施設「さんたの家」報告

～ 渡タイ13年間の奉仕活動報告～

横浜港南台教会員：吉田 登

「あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

(マタイ 18:12～14)

はじめに

私は1941年(昭和16年)生まれで、1983年、横浜港南台教会で秋吉隆雄牧師から洗礼を受けました。今日このような機会を与えられたことを光栄に思います。

はじめに、なぜタイで奉仕活動をするこ

になったのか、お話ししたいと思います。

(注:1971年バングラデシュが東パキスタンから独立、1975年南ベトナムのサイゴンが陥落し戦争終結南北統一、のちインドシナ難民増大、1979年と1989年に国連主催の対策会議開催。1989年ビルマはミャンマーに改称)

1976年9月、タイを拠点にしてビルマ、バングラデシュ、インドを日本 YMCA 第一回アジアスタディーツアーで訪問しました。インドのカルカッタ(1993年、ベンガル語の「コルカタ」に改称)の朝は寒いです。朝露の中、路上生活者が粗末な布に包まって寝ています。その数の多さに押されて、ホテルから出ることもできず、眺めていました。やがて清掃車がやって来て、動かないぼろ布は中身ごと車に積んで行きます。どこへ行くのか? 「彼らは路上で生まれ路上で死んでいく」という現地の人々の説明でした。バングラデシュではスラムに入り、住民と話し合う機会を得ました。極貧、不衛生、鼻をつく匂い、救いようのない激しい貧しさの数々の多さに絶句しました。

タイではスモークマウンテン(フィリピンが有名であった)に住み着いて暮らす人々や子どもたち、首都バンコクが掃き出す膨大なゴミの山で換金できそうなゴミを人より早く拾うために、そこに住み着いてしまった人々やその子どもたち。後に有名になったクロントイスラムやフアランポーン駅の線路沿いに住み着いた人々、そこで暮らす人たちは絶対的貧困から逃れるすべもなく、短い一生をそこから出ることもなく終えるそうです。

彼らは同じ人間でありながら、こんな悲惨な状況の中でしか生きていけないのだ。その時、目の当たりにした光景です。このスタディーツアーでの体験は、その後の私の目を飢えや極貧にあえぐ人々や子どもたちに向けることになりました。

NPO を立ち上げる



1998年12月、タイからの手紙を目にしました。その頃タイでは HIV 感染者、エイズ患者やエイズ孤児が急増し、深刻な状況でした。早くからこの問題に取り組んでいたバンコク YMCA から、「もう限界だ、新たにエイズ孤児 100 人収容の施設を建設してほしい」とい

う支援要請の手紙でした。子どもたちの命がかかっている、誰かがやるべきだと、私は知人・友人たちにその重要性を話して、受けて立つ人はいないかと探しました。そのことを知ったら、感じたら、その人は受けるべきだと思うのですが、そんな人はいませんでした。

当時、バンコクには5万人とも言われるエイズで親を失った子どもたちがいました。5万人の内、たった 100 人を救えたとしても、どれほどのことがあるのか、という声も聞こえてきました。たとえその気持ちがあったとしても、ことが大きすぎます。等身大で手頃なボランティアではないのです。誰も引き受けてはくれません。自分はどうなのか。私にもやれない理由があるのです。今はやらねばならない仕事がある、生活が、家族がある。経済的にはまだ働かなければならない。それに自分の仕事の他にも、社会とのつながりもあります。私はある大きな団体、年間予算 50 億円を動かす団体の責任ある立場の役員でしたし、他にも私が発起人の一人で NPO を立ち上げて、10 年間小学校を建てて毎年贈呈している団体など、当時の私はそれなりに活動をしていました。

しかし、そんな理由で自分が受けないで済まされるものか、もしも自分の子どもが目の前で溺れていたら助けないでいられるだろうか、他人ごととして目をつぶっていいのかと、真剣に考えました。

知った以上、見ぬふりをして通り過ぎすことは許されない。どんな理由があろうとも、自分の目の前で悲鳴をあげて助けを求めているのがたとえ他国の子どもたちでも、見殺しにはできない。私は悩んだ末に「孤児院建設を受けて立とう」と決意しました。

1999年4月、「バンコクにエイズ孤児ケアセンターをつくる会」NPO を立ち上げました。マタイ 18 章 14 節「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父

の御心ではない」を使命として、施設建設に向けて活動を開始しました。このマタイ 18 章 14 節を使命として高く掲げたことが、いろいろな問題と遭遇して挫けそうになる気持ちを振るい立たせてくれました。

募金目標金額、呼びかけ先と方法など、仲間たちと集まって決めていきました。YMCA と教会には呼びかけないことにしました。理由は、献金疲れしていることが容易に想像できたからです。自分たちの努力と働きで成し遂げようと話し合い、士気を上げました。

早速、募金活動を始めました。計画では、建設用地約 3,000 坪はバンコク YMCA が用意するので、10 人収容の施設 10 棟を日本側で作ってほしいというものでした。

知己を頼りに、手紙やメール、ニュースレターを発行して募金要請しました。経済不況下でも、呼びかけられた人々から募金が集まり始めました。ある友人は会合があり、その 2 次会で募金箱を回し、「食事代のおつりも入っていますので役立ててください」と寄付をしてくださったり、私の同業者仲間からも、寄付をしてくれる人が現れました。呼びかけはロータリークラブにもしました。主に横浜、川崎、神奈川県下各地のクラブを訪問して、例会で卓話して、エイズ問題の深刻さと孤児収容施設の必要性を訴えました。募金活動が広がり始めました。その矢先、バンコク側で大きな問題が起きました。用意されていた土地は、雨期には水没してしまい、使用不能なことが判明したのです。

頓挫から再起へ

エイズ孤児救済計画は軌道に乗り始めた時、一転して頓挫してしまいました。悔やまれました。こんな話に乗って、多くの人々を巻き込んでしまい、迷惑千万もはなはだしいではありませんか。計画段階でのチェックを怠った自分の浅はかさ、込み上げてくる悔し

い気持ちは言葉では表せません。自分に全責任がある。自分を許せない、支援してくれた人に申し訳ない、どうすべきかと悩みました。悩んだ末に行き着いたのが、この計画の使命です。

マタイ 18 章 14 節「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

そうです！ 孤児救済が私の使命です。用意された建設用地が水没するのならば、水没しない土地を探せばよいのです。それには予想外の大きな金額が必要となり、募金調達しなければならぬだろう。それが可能か不可能かは自分には分からないが、エイズ孤児救済のために自分のすべてを捧げよう。決意を新たにしました。



タイに渡る

2000 年 6 月 16 日、日本での生活をすべて整理し、59 歳の誕生日を期してタイに渡り、孤児施設建設に専念することにしました。

タイから、エイズ孤児養護施設の必要性をニュースレターやメールで知人・友人、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、ソロプチミスト等々に八方手を尽くして訴えました。

2000 年 12 月 12 日、3,000 坪の土地を取得し、施設 2 棟を完成させて第一期工事完成贈呈式をしました。

翌 2001 年 8 月 22 日、施設 3 棟が完成し、第二期工事完成贈呈式典、園児 20 数名が入園してきました。

「タイ・エイズ孤児と共に歩む会」発足

横浜港南台教会の有志が「共に歩む会」を発足させて、力強いご支援を下さっています。

2001 年 1 月末に秋吉先生はじめ、教会の方々が元気づけにタイまで駆けつけて下さいました。夕食後の懇談の時です。支える会をつくろうという話が持ち上がりました。気の

早い方々が帰国後、すぐにエイズ孤児を救うための会「タイ・エイズ孤児と共に歩む会」を発足させて支援に乗り出しました。タイグッズや手作り品などを販売して得た収益をもって支援しようというものです。この方法は全く無駄のない優れた方法だと私は思っています。

タイグッズを YMCA パヤオセンターから買い上げます。これはグッズを作る側の人々、刺繍をする人々と YMCA への支援につながります。近隣の幼稚園、学校、教会などのバザーは勿論のこと、全国各地のバザーに出向いたり、委託にしたり、夫の出張先の教会で礼拝出席し、子どもたちの窮状を訴えてご協力いただいたり、活発に活動されました。実に楽しそうに活動されている姿には、うらやましささえも感じるほどでした。

「ハッピーホーム」の完成引き渡し式も済み、「タイ・さんたの家と共に歩む会」と名称も改まり「さんたの家」の本格的な支援が始まります。タイグッズを売り上げると、その益金が「さんたの家」の子どもたちの養育支援となります。「共に歩む会」の人たちの温かい愛情は、子どもたちを幸せに育てています。「さんたの家」の子どもたちは愛情を豊かに受けて育っていると私は思いますし、感じます。

子どもが成長していく時には、愛されているということが非常に大切なのです。それが親の愛ならば、最も理想ですが、それが肉親であったり、周囲の人々であったり、施設であったとしても、「愛」が最も大切なのです。

「タイ・さんたの家と共に歩む会」の愛情のこもったご支援は、受ける「さんたの家」の子どもたちをやさしく豊かにしてくれました。素晴らしいことです。感謝しております。

2002年12月2日「ハッピーホーム」落成式
多くの支援者からの募金やご支援で、土地
9,600 m² (3,000 坪)を購入し、日本政府の

草の根無償資金の交付を受けて建設した多目的館など、当初の計画以上の施設がきわめて短期間のうちに完成しました。

全館落成・「ハッピーホーム」贈呈式典には、在タイ日本国大使、タイ国政府から大臣が出席、日本からも多くの参加者を迎えて、盛大に行われました。無事に贈呈式を済ませて、すべてが終わりました。あとは、タイ側がエイズ孤児たちを収容するのです。私のやるべきことは、すべて完了しました。タイに来て、走りに行った2年半でした。スポーツならば試合終了、力を出し切ってゲーム終了です。



振り出しに戻り最初からやり直し

確かに立派な施設はできて、贈呈式も済ませました。しかし、作り上げた達成感、清々しさよりも、終わったという安堵の気持ち、それよりもむしろ空虚さを感じました。本当にこれですべてが完了したのだろうか、これで良かったのか。秋吉牧師に完成の報告をしている中で、「使命を果たされたのですね。ご苦労様でした」と温かいねぎらいのお言葉をいただいたのですが、ハッと気づかされました。使命として常に掲げている「小さな者が一人でも滅びることは、天の父の御心ではない」は、小さな者を“愛”をもって困難から自分の手で救うことが課せられた使命であって、施設建物を作ったのは、その準備にしか過ぎないことに気づきました。自分は孤児を救いに来ているのに、一人の子どもも救っていなかったのだと気づかされました。

振り出しに戻り、最初からやり直しです。今度は、エイズが最も激しいと言われている北タイのチェンマイに活動拠点を移すことにしました。

バンコクの空港、チェンマイ行の待合室で所在なく意気の上がない体を椅子に沈めていました。少し離れたところでは、10人あま

りの日本人お年寄りのグループがいて、リーダーが何やら説明をしていました。リーダーをよく見ると、望月賢一郎牧師先生でした。機をみて挨拶に行くと、「あなたのことは知っていますよ、施設はできましたか？ 秋吉先生からも伺っていました。良いところでお会いしました、ここにおられるのは長野県、静岡県地区の牧師さん方です。ご紹介します」。

光栄にも、牧師先生方に孤児救済活動を知っていただくことができました。望月先生が救済活動のためにお祈りを捧げてくださいました。ありがたいと思いました。

財団法人「さんたの家」をチェンマイで立上げ
2003年10月7日、財団法人 Ban Santa Claus Foundation「さんたの家」はタイ国政府から認可が下り、12月1日の世界エイズデーから北タイ、チェンマイの借家で活動を開始しました。職員にタイ語のできる日本人とタイ人を採用し、エイズ感染者ネットワーク、公立病院、保健所など関係する機関への挨拶と、養育に困難な状況下にある子どもを受入れる施設を開園したことの挨拶に回りました。

2004年2月3日、エイズ孤児養護施設「さんたの家」の開園式典が秋吉隆雄牧師の開会祈祷で行われました。日本から、横浜港南台教会の人々、知人・友人たちが駆けつけてくれました。また、タイ在住の日本人たち、タイ人ではエイズ感染者ネットワークの人々、地元の村長、警察署長、公立病院長、保健所、小学校長、中学高等学校長等々、約100人が集い、祝された式典となりました。連日、病院、保健所やエイズ感染者ネットワークを訪問したり、各地で開かれるエイズ会議に出席しました。

カム・オンさんのこと



ここで、一人のエイズ感染者との出会いをご紹介します。(職員エーの訪問日誌から、分

かりやすくするために、一部筆を加えました)

2月8日(日)

サラピー病院の紹介で、カム・オンさんと6歳のターちゃんの家を訪問しました。元は鶏小屋だったという住まいは、寝具代わりの布が丸めてあり、周りには壊れた機械や道具類が置かれた物置の一角でした。

私(職員エー)がサワディーカー(こんにちは)と声をかけても、振り向いて一瞥しただけで、返事もしてくれませんでした。手土産を差し出すと、ターちゃんは早速中から牛乳を取り出し、飲み始めました。「私たちは病院からの紹介で来ました。オンさん、あなたのお力になりたいと思ってやって来ました」と吉田さんが訪問の意を伝え、私(エー)があとを受けて話し始めましたが、ター坊は母親にまつわりついて髪の毛を引っ張ったりして、話の邪魔をしました。知らない人が突然やって来て母親がいつもと違う様子に、ター坊は不安を感じとっています。吉田さんがゴム風船や紙飛行機を作ってター坊を外に連れ出しました。私(エー)が2時間あまり話し込んでようやくオンさんは心を開いてくれました。

オンさんは窮状を話し出しました。「私は来る日も来る日もつらく苦しいことばかりで、死ぬことだけを考えていました。死ねば、この苦しみから逃れることができます。しかし、私には子どもが4人います。この子たちを残しては死ねません。私は死ぬこともできないのです。どうか、私たちを助けてください。生きたい、私は子どもと一緒に生きたいのです。ミャンマー人、無国籍者だと馬鹿にされ、エイズだと嫌われて生きてきましたが、今日、生まれて初めてあなた方に温かくされて、本当にうれしいのです。あなた方を信じて私は生きたいと思います。私は子どもたちと一緒に生きていきたいのです。私はエイズ

です。いつまで生きられるかも分かりません。あまり長くはないでしょう。でも、それまで子どもたちと一緒にいたい、一緒に生きていきたいのです。あなた方を信じて一生懸命生きようと思います。」涙ながらに語るオーンさんに、私（エー）も涙が止まりませんでした。吉田さんも目が真っ赤でした。私は心からこの人を幸せにしてあげたいと思いました。

この日記のように、職員エーは仕事として、人間としての使命を感じ取ったようです。私は即刻支援を決定し、翌日、半月分の生活費と米5kg、即席めんなどの副食品、油、調味料、お菓子を届けました。カム・オーンさん32歳、4人の子持ちで夫からエイズをうつされたのですが、その夫は5ヵ月前にエイズで死亡したとのこと。麻薬の注射の回し打ちが原因でエイズに感染し、それを妻オーンさんへ感染させたのです。子ども4人の内、ターちゃんだけが感染児です。

約束の2週間後の訪問日、遠くから手を振り迎えてくれるオーンさんは、笑顔がとってもいい。はにかみ屋のター坊は、物陰からお土産は何かとうかがっている。持って来た米、油、即席めんなどを運び入れてから話し合いました。山に置いてきた3人の子どもは食事を食べさせてもらっているだろうか、いじめられてはいないだろうかと心配していました。夫の里ではあるが、疎遠だったそうです。心配事や健康状態などひとしきり雑談して、家をあとにしました。オーンさん親子が土間に寝ているのは、あまりにもかわいそう、眠る時くらいは辛いことを忘れてゆったりと眠ってもらおうと、スタッフ会議で決めました。

ベッドと寝具、鏡、洗面具、石鹸、タオルなどを買い揃えて早速届けました。その時のオーンさんの喜びようは大変でした。私（エー）と吉田さんまでがうれしくなり、共に大

喜びました。

毎朝開くたった3人の会議ですが、重要なのです。タイ語を解せない吉田さんが仕事を採配し、予算を考えながら決定していくのですから。「最も大切なのは、仕事の内容が支援を受ける側の立場を十分に理解したものでなければなりません」と吉田さんはいつも言います。



5月19日(水)

食糧と生活支援金を届けに家庭訪問。山から3人の子どもたちも下りてきて、一緒に暮らしていました。皆で迎えてくれたのですが、ター坊はマイサバイ（病気）でした。3日前から食べても飲んで吐いてしまうとのこと。ぐったりして生気が感じられません。すぐ病院に車で運び、こみました。即、点滴と酸素吸入が始まりました。肺炎をおこしている、脱水症状で危険な状態だったとのこと、間に合ってよかったと胸をなで下ろしました。1週間の入院で済み、退院日には母親を連れて病院まで迎えに行き、無事退院しました。

5月26日(水)

カム・オーンさんから電話がありました。突然家主から2週間後には立ち退けと言ってきたとのこと。現在は無料で借りているので、文句は言えないのですが、昨日は無事退院で喜びもつかの間、今度は立ち退きとは、大変なことになりました。「さんたの家」が借家を探し、家賃を払い、4人の子どもを学校に通わせねばならない。オーンさんは国籍がないために、高額のエイズ薬代は全額自己負担です。いくらかかるか見当が付きません。一家丸抱えの救済は、短くても5年から10年は続けなければならないでしょう。さて、吉田さんはどうするだろうか。施設「さんたの家」からは既に5人の子どもたちが学校や幼稚園に通っていたので、これだけでも未経験

の私たちでは手一杯です。病院の担当者と会って、妙案はないものかと考え調べていくうちに、ある大きな NGO が家族ごと収容できるスペースをもっていることが分かり、問い合わせたら、可能性がありそうだと判明しました。カム・オーンさんが面接に行くことでアポイントがとれました。



5月29日(土)

オーンさん一家は胸を弾ませて、サンタ号(「さんたの家」の小型トラック)でその NGO 施設を訪問しました。病院の担当者も同行してくれました。その施設の立派なこと、夢かと思えうほどです。約束していた責任者はどうしたことが不在でしたが、施設を見学したあと、オーンさんが入るであろう部屋にも案内してもらいました。施設で家政婦として働けば、4,500 パーツが支給されるという高条件です。しかしオーンさんは、ここは嫌だと言い出しました。オーンさんは、なぜ嫌だと言い出したのか、理由を言いません。

6月1日(火)

オーンさん一家を連れて施設を再訪。オーンさんは、自分は嫌だが子どものことを考えてこの施設に入ることにしたと話してくれました。職員に訪問の意を伝えて、責任者に取り次ぎを依頼しました。長いこと待たされたあげく、現れたのは年配の白人女性で、「エイズ感染児の一人だけなら預かるが、あとの人は受けません」とだけ言い残して立ち去ってしまいました。取りつく島もありません。1時間あまりも待たされてこれでは、と見ると、吉田さんが言いました。「帰るしかない。施設は立派だが、そこに関わっている人に愛が感じられない。同じクリスチャンとして残念だ。さあ帰ろうよ。」



6月2日(水)

生活支援金と食糧を持参して訪問。今後についてオーンさん、「さんたの家」、病院の福祉担当者の三者協議に入りました。立ち退き騒ぎは病院の福祉担当者から交渉をもらった結果、家主は今すぐにどうするという計画はないので、そのままいてもよいということになりました。協議の結果、「さんたの家」の支援はこれまで通り続け、さらに子どもの教育費を追加支援する。エイズ薬は無料配布されるよう病院側で考えてもらう。一番の問題はタイ国籍がないということで、学校が子どもたちの転校を認めてくれないことです。

6月7日(月)

オーンさんから、子どもたちはター坊を残して山に帰したという電話が入りました。山の学校では、国籍がない子どもでも、授業は受けさせます。ただし、卒業証書は出ません。

後日、ター君を含む4人の子どもたちは、国立全寮制小中学校へ入学できました。これには、国籍がない人はいかに障害があり、困難な生活を強いられているかを実感しました。オーンさんの場合は、山の村に届け出がありますから、村外に出るには特別許可が要りません。許可なしでチェンマイまで約250kmの移動は禁止されています。検問所も3箇所あり、さらに臨時に設けられる検問もあります。オーンさんは山では生活が成り立たず、収入を得るためにチェンマイで暮らしています。子どもたちを全寮制学校に入れるために、オーンさんを乗せて何度も往復しました。ここでありがたいことに、強力な助っ人が現れました。中村昭雄さん(横浜港南台教会開拓者の一人、故澤田喜代子姉の弟)です。彼は自慢の高級四輪駆動車を駆って、山道難所も往復500kmもなんのその、実に軽快に走ります。おかげで、私たちの仕事である、子どもを全寮制学校に入学させるためどうするかに専念できました。入学資格がない子どもを入

学させようというのです。

(以下解説します)

まず、制度上入学資格を制限しているのはタイだけの制度で、「子どもの権利に関する条約」国連第 44 回総会決議に反しているこの制度が古い、というこちらに正当性があります。このことを公立病院の福祉担当者に理解してもらった上で、学校側と交渉してもらいました。公務員同士の話は至って簡単で、すぐに許可を下してくれました。3人の子どもは安心して預けられます。エイズ発症しているター坊について綿密に打ち合わせ、毎日飲むエイズ薬について病院担当者がすべて手配をしてくれました。こうして移動を禁じられている無国籍者オンさんの子どもたちは、絶対に不可能と思われた全寮制学校に兄弟姉妹そろって行けることになりました。

公立病院の担当者は人間性豊かで、オンさんに味方してくれました。こちら「さんたの家」の作戦は成功しました。

それに、中村昭雄さんの助っ人振りです。山道 500km を何度往復したことが、彼は楽しみながら運転してくれました。中村さんにはお世話になりました。感謝をしています。

2013 年

ここ 2 年ほど会うことができません。オンさん一家の情報は、サラービー病院のエイズ感染者ネットワークの人から伝えられました。オンさんは、貧しいながら毎日仕事に精出しています。長女は中学校を卒業して、母親と一緒に建設現場で働いています。次女と長男は真面目に学業を続けています。末っ子のター坊は、エイズの進行は止まっています。時折体調を崩し心配をかけますが、大きくなるにつれて、体力がついてきました。何よりもオンさんの逞しさです。建設現場で資材運びやコンクリート流しなど、男勝りの仕事を休まずに続けられる体力の持ち主です。オ

ンさんは、まれにエイズで体がだるいことはあっても、生活のために仕事があれば休まないという気力でエイズを乗り越えています。子どもに対する愛情が豊かで、一緒に生きたいという生命力旺盛です。肝っ玉母さんのエイズに立ち向かう姿は美しい !!

もう危機からは脱したようです。「さんたの家」の役目は終わったようです。



ヌンとサーイの兄妹

2004 年 3 月、保健所や病院へ挨拶回りに出かけた先でのことでした。前方から葬儀の列がやってきました。道幅が狭いので、車を端に寄せ、停めていました。亡くなった人の写真を掲げていますので見ると、20 代と思われる美しい人でした。同行の職員二人は「私たちくらいの年齢ね、きれいな人ねえ、ソクラーン（タイ正月、水かけ祭りで有名）を迎えることができなかったのね」と会話していました。

それから 1 ヶ月が過ぎたころ、一人の男性が「さんたの家」を訪ねてきました。おばあさん 66 歳と孫二人、7 歳の兄と妹 3 歳が暮らしているが、収入もなく困っているので助けてほしいとのことでした。

早速その家庭を訪ねました。おばあさんが話し出しました「先月、私の娘が二人の子どもを残して亡くなりました。この孫は 3 歳です。生まれてすぐに父親がエイズで死に、いま 3 歳で母親をエイズで亡くしてしまったのです。不憫でなりません。上の孫は今年 1 年生になります。これからお金がかかりますが、私は 66 歳で、もう働いて収入を得るだけの体にありません。助けてほしいんです。」

亡くなった人の写真を見ると、あの時に道で出会った葬儀の写真です。支援約束をして家を辞しました。スタッフ会議で支援の内容が決まりました。月に 2 度訪問し、家計費補助、米、油、ナンプラー、砂糖、ミルク、魚

の缶詰など届け、訪問時に健康状態や困り事の相談に乗ることを決め、早速支援物資を買い揃えて訪問しました。簡素なつくりの家ではあるが、整然としています。かまどは灰が掻き出されている、薪は同じサイズに切り揃えて積まれていました。家の周りも掃除が行き届いていました。早速持参した食糧と家計費補助金をお渡ししました。凜とした姿勢のおばあさんに、話の切り出しにとまどいました。「サワディーカップ、ナーラックマー、チュウアライカップ(こんにちは、まあ可愛いですね。お名前は?)」と孫に話しかけると、皺しわ笑顔でおばあちゃんは、「孫のサーイ、3歳です」と話し始めました。孫も含め、健康状態、困ったことはないかなど、職員とひとしきり話し合っ、次回の訪問日を決めました。

以降、月に2度の訪問支援が続いたある訪問日、1年生のヌンが制服のまま家にいるので問うと、スクールバス代が払えなかったことで、バスに乗れなかったとのこと。すぐにおばあちゃん、ヌン、サーイを車に乗せて学校へ行きました。生徒数、千数百人の大きな学校です。ヌンは授業に出し、私たちは応接室兼校長室へ通されました。となりは事務室で職員たちが立ち働いていました。校長先生にヌンのバス代は「さんたの家」が学校へ支払い、今日の下校からスクールバスに乗れることになりました。校長先生立会いで、ヌンの奨学金をヌンと祖母に渡し、その奨学金をそのまま学校に渡して管理してもらうことになりました。エイズ孤児ヌンが肩身を狭くしないで済むことを、何よりもおばあちゃんが喜びました。以後、訪問日は出来る限り土日 を充て、学校に行っているヌンにも会えるように工夫をしました。

2005年3月、出会いから1年が過ぎようとしている3月の1回目家庭訪問日。いつも祖母の陰に隠れて一言も発しなかったサーイが

「サワディーカー」とワイ(両手を前で合わせて挨拶)をしてくれたのです。おばあちゃんと手を取り合って喜びました。健康状態や生活について諸々のおしゃべりを済ませて、次の訪問日は3月31日と決めて手を振り、別れたのです。

「おばあちゃんが倒れてそのまま亡くなりました。28日と29日が葬儀です」と連絡が来ました。3月29日、おばあさんの葬儀に参列、無言の再会でした。サーイは生まれてすぐに父親を亡くし、3歳で母親と死に別れ、4歳になった今、可愛がって育ててくれたおばあちゃんを亡くしてしまったのです。

29日夕刻、秋吉先生と「共に歩む会」横浜港南台教会の方々を「さんたの家」に迎えました。3月30日は「さんたの家」新ホームの落成式が秋吉牧師の司式で行われました。日本からも多くの人々がやって来て、落成式典は盛会でした。

ひと月後、伯父さんに連れられてヌンとサーイが「さんたの家」にやって来ました。伯父さん夫婦が帰る時、別れて置いて行かれるのは嫌だと何時までも泣いていました。

伯父さんたちが帰ったあと2時間近くも泣いて、疲れたところに他の子どもたちが遊びに連れ出してくれました。他の子たちも同じような境遇を通過してきているので、すぐに友達になれるのです。子どもたちの生命力の強さには驚かされます。夕食時には、すっかり皆と仲良しになっていました。

ヌンは2年生に転入、サーイは幼稚園に入園することになりました。入園の日、先生との面談も済み、教室で園児に紹介されて、その輪に入らねばならないのですが、私の手を離しません。楓のような小さな手で力一杯握りしめています。みんなの注目を一身に集めるかたちになってしまったので、みんなと離れて片隅で目線をサーイに合わせ、両手でサーイの小さな手を包んでお祈りをしようと

話しかけました。「神さま、サーイを守ってください。小さなサーイが幼稚園のみんなの輪の中に入れますように。サーイが園のみんなと仲良しになれますように強めてください。

イエス様のみ名によって祈ります。アーメン」

サーイの指を1本1本離しながら、数えるように祈りました。納得したようです。みんなの輪に入っていきました。

「夕方には迎えにくるからね」。お兄ちゃんヌンと一緒に帰れるということを理解したようです。

2013年3月、サーイは小学校6年を卒業し、全寮制の国立中学校に「さんたの家」のインと一緒に入学しました。私の手をカ一杯握りしめていた、楓のような小さな手だったサーイも、今では大きく成長しました。

兄のヌンは既に2009年4月、ローウアデーモン寺から学校に通うことになり、今では立派な高校生に成長しました。二人とも自分の力でしっかりと人生を歩んでいくことでしょう。

ムアイさんのこと

ムアイさんは26歳、エイズ感染しています。夫と息子ブイ(6歳)がいます。わら萱屋根の小さな家に夫の両親と姪イムちゃん(5年生)も同居して、6人で暮らしています。イムちゃんの両親はエイズで既に亡くなり、イムちゃんもエイズ感染をしています。当時の日記から解説を加えてご紹介します。

2004年7月16日(金)午後3時過ぎ、ゴーサリアン地区のムアイさんが、病気の悪化で医者にかかりたいので治療費を援助してほしいと、20kmの道のりを夫のオートバイの後ろに乗って「さんたの家」にやって来ました。やつれた体にはエイズ発症の紫色した吹き出物が出ています。顔は黒ずんでいて、肩で息をしています。

どう対応したらよいのか？ 初診料を負担してあげればそれで済むというものではない。

簡単に応えられない大きな問題を含んでいます。既にカム・オンさんへの家庭支援が3月から始まっていて、1ヵ月2度の訪問をしています。

ムアイさんの支援は医療費がどのくらいかかるかも見当がつかない。しかし、助けを求めて来た人に「費用が高額になるから支援できません、お帰り下さい」と断ることはとてもできない。衰弱した体を押して20kmもの道程を「さんたの家」に望みをかけてやって来たのです。

ムアイさんも国籍がないので、公の補助などまったく受けられませんから、エイズ治療や入院などしたら、費用がどのくらいかかるのか全く見当がつかず。返答に窮して、「お話は伺いました。今日は金曜日の5時を過ぎていますので病院は受け付けませんので、月曜日にこちらからお宅に伺ってお話ししましょう」と言って、ムアイさんには帰ってもらいました。ムアイさんにとっては、支援してくれるのか、しないのかの答えをもらわずに帰るのは、さぞ不本意だったと思います。

私がタイにきた主目的は、エイズ孤児の救済です。ムアイさんのような高額医療費が予想される大人を救うほど財政基盤がまだできていません。しかし、目の前に現れたムアイさんは、エイズでもう体力が衰弱し始めています。それでもできないものはできないと、きっぱりと理性的に断るべきだと思う、一方で衰弱し始めているムアイさんを今救わなければならないとする感情と葛藤が続きました。2日後の日曜日に、全面的支援することに決定しました。

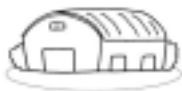


7月19日(月)

ムアイさんを病院に連れて行き診察、検便容器をもらい、診察費と下痢止めの薬代を支払いました。エイズに関しては、諸々の検査結果を見てからとなります。

7月23日(金)

ムアイさんを連れて、サンカンペーン病院に検便を提出。



7月26日(月)

検査結果に基づく診療開始、月曜日の病院は大変な混みようでした。待合室でムアイさんと子どもプイ君のことなど話していると、事務局員が「お話がありますので」とムアイさんを残して事務室に通されました。「過去に溜まった診療代と薬代があります。それと、これからの診療費と投薬代をお支払いいただきたい」というのが呼ばれた理由でした。

ムアイさんがこの病院に来たがらなかった理由は分かったが、あまり突然で、それも大きな金額に聞こえたので、私はまず、今日、これから発生するものについては私ども「さんの家」財団が責任をもってお支払いいたしますので治療をしてください。よろしく願います、と言いました。溜まったものについては、別途ご相談させていただくことにしました。

内科診療が済んだあと、3階のエイズ担当に回され、しばらく待った後、ムアイさんとスタッフが入室。私はタイ語を解さないのので、外で待機しました。待つこと2時間余、出て来たスタッフは開口一番「ムアイさんのエイズ薬を無料で出してもらえることになりました」。あり得ないことです。「本当かい？」耳を疑いました。2時間、室内では高額のエイズ薬投与について、「さんの家」のスタッフは、無料配布の手立てはないのか、どうすれば無料で薬をもらえるのかをしつこく懇願し、担当医は根負けして無料配布の条件を出したのです。製薬会社が薬の副作用を調べるために特定して無料で出しているのですが、それをムアイさんに適用してもらえよう頼んだのです。

条件は、毎日薬の副作用について正確なデ

ータを取ることです。ムアイさんは読み書きができません。家族には細かいデータを取る能力がありません。ムアイさんには適用できないとする医師に、スタッフは「私たちが毎日訪問して薬の分量は正確に守らせて細かなデータ項目を記入します。出された条件は全部守らせます」と約束し、こうしてエイズ薬(抗HIV薬)の服用が始まりました。ムアイさんはこれまで何度か医者にかかっていたが、いつも約束は守らない、診察日には来ない、診察代は払わないなどで、さじを投げていた患者だったのです。今までに溜まった診察費と薬代を後回しにした上に、こんな医者泣かせの患者とこれからも付き合わされるのでは、さぞ大変なことだろう。ムアイさんにはよくよく言って聞かせました。「お医者さんもあのようにあなたを治そうとしてください。私たちがあなたが病気に勝つよう、どんな支援もやり通しますから」。このようにして、ムアイさんはエイズ薬を服用するのですが、文字を読めないのので、知恵を絞りました。夜6時に飲む薬には星のマーク、朝8時に飲む薬には太陽の絵を描きました。

7月27日(火)

データ取り初日、薬は昨夜6時に指定通り服用、しばらくして吐き気をもよおす。夜中の2時ごろから目まいが2時間くらい続きました。今朝は8時に服用したが、やはり吐き気がする。夕べから頭痛が続いている。食欲がない、舌が痛くて甘いものは食べられないとのこと。

エイズ薬の副作用は彼女を苦しめました。それでも下痢は止まり、気管支も良いようなので、幾分救われました。これからはずっとこの副作用は続くのであろうか。苦しいだろうが頑張ってもらいたい。

2週間のデータ取り期間終了後もムアイさ

んは抗 HIV 薬を無料で飲むことができました。

その後、一時は快方へ向かったように見えたムアイさんですが、周りの状況も悪く、9月には夫が交通事故で入院し、その看病のために1週間も病院に泊まり込み、体力を消耗したり、子どもが食中毒で病院に入院したりと災難が続き、彼女はすっかり体力を消耗してしまいました。それでも希望をもって薬だけは飲み続けました。

2005年2月12日(土)

右目が真っ赤に充血していて、何も見えない状態。医師の診察は CD4 (病気に対しての抵抗値) が落ちているので、回復を待って目の治療をするとの診察。

2月19日(土)

朝訪問、ミルクを渡すが、自分の力で受け取ることができない。夜、ムアイさんの夫から緊急入院したと電話が入り、すぐに見舞う。

2月24日(木)

退院するので病院に迎えに行き、入院費用を清算し、家まで送り届ける。これからは週2度訪問し、体力を回復させるために栄養補給食を届けて見守っていくことにした。

3月30日(水)

「さんの家」新館完成式典、司式は秋吉隆雄牧師。

3月31日(木)

秋吉先生と「共に歩む会」の人々とムアイさんを見舞う。この時も体力は回復していない。

以後、半年ほど寝たり起きたり、入退院の生活を繰り返し、8月からは意識もまだらになっていきました。この間、私たちは毎日の

ように訪問し、食べたいものを届けて声をかけて力づけました。



9月14日(水)

ぐったりしていて精気が感じられない。声をかけても応答できない。

9月16日(金)

朝訪問。昨夜から意識もなく昏睡状態。家族は葬儀代の心配をしている。夕刻5時、眠ったまま27歳の人生を閉じました。

9月17日(土)

葬儀に参列。ムアイさんは最期まで生まれたところ、両親や兄弟姉妹について夫にも誰にも語らず、持っていた住民登録証の書類は他人のものでした。国籍もなく、ムアイさんの存在を証明できるものは何一つありませんでした。ムアイさんと呼ばれた名前さえも他人の住民登録によるものでした。

しかし、残された息子プイがいます。小学1年生の病気ばかりしていたプイが2013年の今は中学3年生に成長しました。

ムアイさんへの支援では、いろいろ考えさせられました。頼ってくる人には拒まず、すべて受け入れれば道は自ずと開かれる。神が見ていてくださる。「さんの家」のような小さなところに頼って来る人は、他にどこも行き場のない弱く小さな人たちです。だからこそ、拒むことは許されないことを学びました。

まとめ

「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」(マタイ 18:14)

- 1 1941年(昭和16年)上海市生まれ。1983年秋吉牧師から洗礼を受ける。
- 2 1984年からタイには毎年訪問し、交流をしてきた。

- 3 2000年6月、タイに渡り、エイズ孤児施設建設に専念する。
 - 4 2002年12月、タイ国の首都バンコクの郊外にエイズ孤児100人収容の施設「ハッピーホーム」を建設完成させ、バンコクYMCAに寄贈。
 - 5 2003年10月7日、タイ国財団法人Ban Santa Claus Foundation「さんたの家」認可。
 - 6 2003年12月1日、世界エイズデーに支援活動借家で始まる。
 - 7 2004年2月3日、「さんたの家」開園式。日本からは秋吉牧師、「タイ・さんたの家と共に歩む会」、横浜港南台教会の方々等々、100名余の参加者があった。
 - 8 2004年5月、エイズ孤児5人が「さんたの家」から学校や幼稚園に通い始める。
 - 9 2004年7月、探していた新ホーム建設用地が与えられる。
 - 10 2005年3月30日、新ホーム落成式典が秋吉隆雄牧師司式で開催。日本国総領事、チェンマイ県知事、「タイ・さんたの家と共に歩む会」、バンコクYMCA理事長、総主事出席。
 - 11 2006年、チェンライ県タッタオ村のモン族、アカ族支援始まる。
 - 12 2008年5月19日、創立5周年記念「さんたの家・ラフ族子どもセンター」を開所。フアイマフアン村106世帯約400人に生活改善、衛生指導、識字教育と子どもたちを学校に通わせるなどを指導する。ラフ族指導者を職員に迎えてプログラムを展開。
 - 13 2009年10月、NHK WORLD TVで「タイの子どもたちを笑顔にする熱帯のサンタクロース」が英語で海外放送され、日本向けには翌年10月27日、NHK BS1地球応援団「熱帯のサンタクロース」で「さんたの家」が放映された。
 - 14 2004年度在園児5名卒園2名、困窮家庭支援12+2グループ1施設、奨学支援63名。
 - 15 2005年度在園児9名卒園1名、困窮家庭支援22+2グループ1施設、奨学支援246名。
 - 16 2006年度在園9名卒園2名、困窮家庭支援50+2グループ1施設、奨学支援266名。
 - 17 2007年度在園14名卒園3名、困窮家庭支援47+2グループ1施設、奨学支援226名。
 - 18 2008年度在園12名卒園5名、困窮家庭支援47+2グループ1施設、奨学支援350名。さんたの家ラフ族子どもセンター(106家庭約400人は別統計)への支援が始まる。
 - 19 2009年度在園14名卒園1、困窮家庭支援40+2グループ+1施設、奨学支援420名。
 - 20 2010年度在園16名卒園3名、困窮家庭支援25+2グループ+1施設、タイ政府の政策で教育費15年間無料化が浸透し、学校支援に切替え。園児の学力向上に力を注ぐ。
 - 21 2011年度在園18名卒園1、困窮家庭支援24。エイズ患者グループ運営の幼稚園閉園。エイズグループ自立。園児イン5年生が成績優秀、品行方正で県知事から表彰される。
 - 22 2012年度在園14名、困窮家庭支援20家庭。園児インとトンの学年成績トップ争い。園児1名母のもとに帰る。
 - 23 2013年3月31日施設「さんたの家」閉園、園児13名を其々の保護者、施設の下に届ける。
- 財団法人Ban Santa Claus Foundationは弱者救済支援を継続。吉田登は第一線から引退する。

養護施設「さんたの家チェンマイ」閉園のご挨拶

養護施設「さんたの家」は2013年3月、在園する子ども達の学年度終了を以って養護施設「さんたの家」を閉園いたします。これまで皆様からいただきました温かいご支援に心からの感謝と御礼を申し上げます。

私、吉田登がタイに渡った2000年は、エイズHIV患者急増、エイズ孤児とその原因になっているスラムや貧困救済は急務となっていました。

タイ国財団法人「さんたの家」を設立し、2003年12月1日、世界エイズデーを以って北タイのチェンマイ市郊外のサンカンペーンでエイズ孤児と貧困家庭救済活動を開始し、翌年2月には養護施設「さんたの家」を開園、2005年3月に自前のホームが完成しました。

以来、養護施設の運営と貧困家庭とその子ども達や山岳民族への奨学支援・生活支援活動に精力的に取り組んできました。これがマスコミに取り上げられ、2007年には日タイ修好120周年記念記録映画に出演、2009年・2010年に「さんたの家」の活動が「熱帯のサンタクロース」としてNHKテレビで放映されました。小さなNGOの働きがこのように大きく評価を受けたことは、皆様からの尊いご支援の賜物に他ならないと感謝をしています。

タイ社会は、2003年「さんたの家」の活動を始めてからの約10年間で目まぐるしいほど急速に経済発展を遂げてきました。国力は増し、社会保障も整備されてきました。教育費は幼稚園から高校卒業までの15年間で無料となり、医療費も自己負担なしの無料。国立の全寮制小中高校は設備も整い、全額無料で各地に開校されています。山奥の子ども達の村でも道路が整備され、換金性の高い農作物と果実の栽培が可能となり、生活レベルが向上してきました。このような社会状況の下で皆様からの尊いご寄付を用いて、これからも養護施設「さんたの家」を継続していく意味が問われます。

私は2009年放映のテレビインタビューで「本当はこのような施設はなくなった方がよい。そういう豊かな世の中となるように願っています」と話しました。

今、その時が来ていると判断し、養護施設「さんたの家」閉園を決意いたしました。在園している子ども達13人は、それぞれに国立全寮制小中学校、祖父母や親類の下で暮らすことになりました。子ども達は「さんたの家」で学んだ多くのことを力に、これからも立派に生きていけると信じます。

今後、私は日本に身を移しますが、財団法人Ban Santa Claus Foundationは国の福祉政策の恩恵にあずかれない国籍のない人々等の支援活動を継続していきます。「さんたの家」閉園のために移動しなければならなかったこの子ども達には、必要に応じて中学・高校・大学進学と安心して学べるための奨学支援をして成長を見守っていきます。

長きにわたり養護施設「さんたの家」に頂きました温かいご理解・ご協力ご支援に心から感謝と御礼を申し上げます。

Ban Santa Claus Foundation 理事長 吉田 登



社会委員会からのお知らせ

社会委員会の学習会で取り上げてほしいテーマがありましたら、社会委員までお知らせください。